

2024年11月15日大和川-龍田川周辺で観察した植物

作：岡田

シャクチリソバ（赤地利蕎麦）タデ科ソバ属＊花期＝7～10月

名前の由来＝漢名で「赤地利」と言う。これを日本語読みで替えたのみ、牧野富太郎が和名として命名。私の想像では、宿根が黄赤色をしているのでそこから来たのではとおもいます。ヒマラヤ原産の宿根草で蕎麦と同属であるが自殖生です、地下に黄赤色の根茎を残して越冬するのでシュツコンソバとも呼ばれている。昭和の初めに小石川植物園で栽培されていたのが逸出して野生化、近年も薬用として栽培されている（根茎や茎を解熱剤として使用）葉の形状はホコ形の三角形で、ソバ属共通の形状をしている、実はエグミが強く食べれないが若葉は湯がいておしたしなどで食べれる。

＊ソバとは古名でソバムギの略でソバムギのソバは陵のことでソバムギとは角のあるムギという意味です＊花言葉＝個性的



カナムグラ（鉄葎）アサ科カナハラソウ属＊花期＝8～10月

名前の由来＝強靱なツルを鉄に例え、ムグラ（葎）は草が繁茂して絡み合った様子を表す。他にムグラと言う名の草、ヤエムグラ。ヨツバムグラ等々あるが本種とは関係ない、ムグラの草が繁茂して絡み合っている様子は同じです。カナムグラは高槻の鶴殿のヨシの上に覆い被さりヨシの生育をはばみ倒してしまうので、春先の芽生え時に引き抜く作業をしている。繁茂した本種のツルは強靱で絡み合っており切ったり剥がしたりするのは困難です、雌雄異株の1年草、葉は長い柄で対生、5～7裂に深く切れ込んで掌状、葉の縁には鋸歯が多い、表面には荒い毛が生えザラつく、熟した穂状の実はいーのホップに似ている、英名では「j a p a n e s e h o p」＊花言葉＝力強い人



アレチウリ（荒地瓜）ウリ科アレチウリ属＊花期＝8～9月

名前の由来＝増殖力が旺盛で荒地などによく生え、草姿がウリの仲間に似ているので、葉や茎の草姿は冬瓜（トウガン）等のウリ科の葉に似ている、果実は小さく1. 5 c m程度で食用のウリとは異なります。北米原産、日本には1952年（昭和27年）清水湊で最初見つかかり、あっという間に本州以南九州まで広がった、特定外来生物に指定されている。林縁や河川の土手などに群落を作る、茎はツル性で数mになり、3～4分岐した巻きひげで他物に絡まる、葉は長い柄があり3～7裂する、表面は白色の凸面がありザラつく、繁殖力がすごく1株で25. 000個以上の種子ができる＊花言葉＝嫌われ者・生命力あふれる。



アメリカアサガオ（亜米利加朝顔）ヒルガオ科サツマイモ属＊花期＝夏～秋

名前の由来＝アメリカからきたアサガオの意味、アサガオとは、朝の時間帯に咲く、花の形が顔ににているので、「朝顔」となった。熱帯アメリカ原産、江戸時代観賞用として導入されたが、現在では野生化して道端や河川敷などに繁殖している、全体に短毛がありザラつく、茎はツルになりよく分岐し長さが数mになる、葉は心臓形で3～5裂長い柄があつて互生、葉腋から短い柄のある花序をだし、直径3 c mぐらいのブルー色のロータ形の花をつける、花柄の途中にやや多肉の苞葉が1対ある＊花言葉＝硬い約束・快晴



アキノノゲシ（秋の野罌粟）キク科アキノノゲシ属＊花期＝8～11月

名前の由来＝秋に花が咲くケシに似た葉で野に生えているから。有史以前に大陸から人の手で持ち込まれた有史以前帰化植物、葉に切れ込みのある種と切れ込みの無いホソバ種、混在しているのもあり、あまり分類する必要はないようです。リュウゼツサイは鶏の餌として台湾からきたが、アキノノゲシの葉の切れ込みが深い物から選抜されたものですので、花での区別は出来ない、花はタンポポと同じ舌状花です。別名、ウマゴヤシ、乳草、ウサギギク、日本全土の日当たりの良い荒地や草地に生える高さ60 c m～2mになる、葉は互生、上の方に付く葉は小さくて全縁、茎を切ると白い乳液が出るので別名の乳草と付いている、本種は人の活動領域により生えていない春に咲く「ハルノノゲシ」にたいしてよく似た葉で秋に咲くので「アキノノゲシ」とも言う。



セイタカヨシ（背高葎）イネ科ヨシ属

ヨシに似るが茎が太く肉厚であり、冬に枯れることがない、竹に近い性質、ヨシは冬に枯れ茎が薄い。

